

序 天下布武へ向けて

出世魚のよじに

織田信長は生涯にわたって数度居城を変えている。それはまるで大きくなるたびに出世し、名前を変えていく魚のごとくである。

もともと尾張の守護は斯波氏であった。その元で織田氏は守護代を勤めていた。『信長公記』（奥野高広、岩沢愿彦校注、角川文庫）によると、織田氏は尾張の「上の郡四郡」を支配し岩倉城を居城としていた織田伊勢守と、「下郡四郡」を支配し清洲城を居城とする織田大和守とに分かれていた。両者は常日頃から争いごとが絶えなかったようである。大和守の家には、織田因幡守、織田藤左衛門、織田弾正忠の三奉行がおり、このうち弾正忠が勝幡城を居城とし、信長の曾祖父以来、この勝幡城が居城であった。

しかし、信長の父である「備後守」（織田信秀）はあるとき、「那古野へこさせられ、丈夫に要害おおせつけ」られた。さらに信秀は、一五三四年（天文三三）五月に「嫡男織田吉法師」

(信長)に那古野城を譲り、みずからは「古渡と云う所に新城をこしらへ」居城としている。通説では、信長は一五三四年(天文三)五月にこの那古野城で生まれたといわれている。

那古野城はもと今川氏の城で、天文年間に信秀が奪取したものである。その位置は今の名古屋城の二の丸にあたると思われる。しかし、これについては名古屋藩士奥村徳義が記した『金城温故録』にある「往昔、今川氏豊居しといふる名古屋古城は本丸の東、二の丸の所に在りし趣なり」とする説によつてにすぎず、くわしいことはわかっていない。信長はこの城で父信秀の死後、家督を継ぎ、守護代織田広信を殺害して清洲城を奪取する一五五年(天文二四)四月まで居城している。ちなみに、那古野城はともに謀議を計った叔父信光に譲っている。

信長は「清洲と云う所は國中真中にて富貴の地なり」として清洲城へ移転した。清洲城は守護代大和守敏定の頃から守護所として使用されてきた所である。城は愛知県春日井郡清洲町(現・清須市)に所在する平城である。五条川の自然堤防状間の中州に立地している。したがって、本丸のすぐわき、城の

立地している。したがって、本丸のすぐわき、城の



図1 ●信長の居城の変遷 (▲は重臣の城)

ほぼ中央を河川が横切っている。城は櫓やぐらが建つ本丸を中心に三重の堀で囲われていたことが『信長公記』の記述や『清洲村古絵図』（名古屋蓬佐文庫）に、また近年実施された発掘調査の結果によってわかっている。

一五五九年（永祿二）二月、上洛し將軍義輝よしてるに謁見した信長は、三月に尾張を平定した。一五六〇年（永祿三）桶狭間で今川義元を倒し、そのまま美濃へ進入した。そして、一五六三年（永祿六）七月、美濃攻略のために小牧山こまきやまに居城を移した。

小牧山城は小牧市堀の内一丁目に所在する標高八五メートルの独立丘陵に位置する平山城である（図2）。家臣団や町屋も清洲から移転させ、小牧山南麓には城下町も形成されている。信長のはじめの築城といわれている山城である。信長はここで四年間すごしている。

そして、一五六七年（永祿一〇）八月、小牧



図2 ●空から見た小牧山

信長は家臣団や町屋を清洲から移転させ、南麓に城下町を形成した。

山から美濃の斎藤龍興たつむぎを攻略して、居城を稲葉山に移転した。『信長公記』には井口を岐阜とあらため城下町を整備し城を金華山に築いたとある。岐阜城は長良川沿いに立ちただかる標高三三六メートルの金華山頂に立地している。もともとは鎌倉時代に二階堂氏によって築城されたものであるが、戦国期は斎藤道三、義龍よしたか、龍興が居城としていた。フロイスの『日本史』にもあるとおり、信長の居館はポルトガルやインドの宮殿にも劣らないくらいとても精巧、美麗、清浄であったといわれ、宮殿は四階建てであったとされている。この建物が本当に四階建てかどうかは議論のあるところであったが、二〇〇七年から一〇年をかけ、岐阜市教育委員会が発掘調査を実施し庭園を含む館の全貌が明らかにされ、信長の城の発展形態を考えるうえで重要な成果をあげた。

また、この山下には、千畳敷と称し、信長の居館の一部が千畳敷遺跡

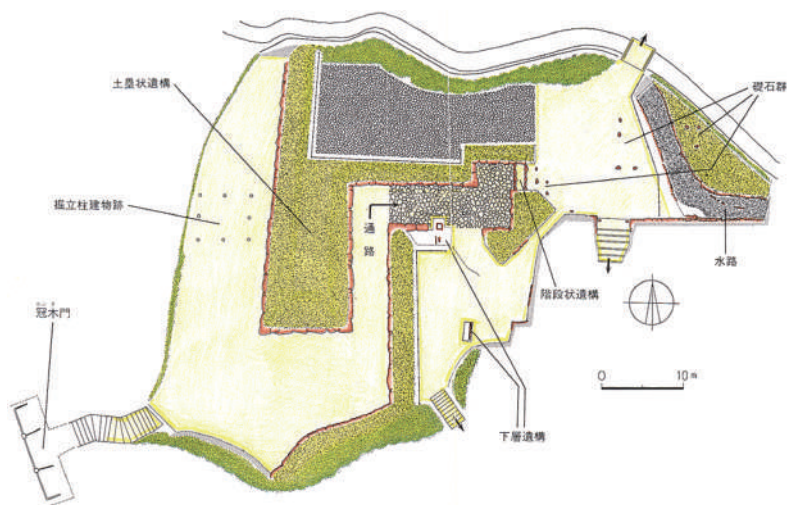


図3 ● 岐阜城跡・千畳敷「織田信長居館跡」

居館部の虎口部分周辺に相当する遺構と石垣（上の写真）が発見されている。

として発掘調査され、報告されている部分もあった(図3)。ここでは居館部の虎口部分周辺に相当する遺構と石垣が発見されている。また、山頂の城についても石垣の存在、座敷のある建物の存在などの記述があり、これらも確認調査が進んでいる。

しかし、この美濃一國支配の象徴としてつくられたみずからの居城をも信長は放棄する。そして、一五七六年(天正四)、「天下布武」の礎となすべき安土城の築城をはじめるのである。

安土城の築城へ

安土城の築城は、「天正四年 正月中旬より江洲安土山御普請、惟住五郎左衛門に仰付けられる」(『信長公記』)の記事で確認できる。

なぜ、信長はここ近江の地、安土に新たな城を築こうとしたのであろうか。前述のとおり、信長はみずからの居城を、情勢に合わせてたびたび変えていた。出世するたびに大きな家に住むだけではなく、その時勢に合わせて居住を変えていたことには、それなりのわけがあった。その最期の地が安土であった(図4)。

居城を岐阜から安土に移したのは、信長にとってはつぎの目標へのステップアップであった。一つは城の位置、岐阜城との関係を補うことにあった。それは美濃から京都までの距離にあった。一五六九年(永祿一二)一月に起こった三好三人衆による義昭の急襲が原因であった。信長はすんでの所で政権を失うという危機に見舞われたからである。このときに、信長は岐阜から大雪のなかを一騎がけで一〇騎を従えて京へと上った。三日路かかるところを二日路でかけ



図 4 ● 空から見た安土山

築城当時、安土山は三方を湖水で囲まれていた。
1947年の干拓事業によって、現在は周囲が埋め立てられている。

たことが『信長公記』には記されている。平素は三日かかるという岐阜と京との距離にとても不安を感じていたようである。

それに加えて今一つは、社会情勢と新たな政権の構想にあったと考えられる。上洛という一大イベントの結果、天下布武の名の下に、室町幕府と朝廷をバックアップするという政権を彼自身が担おうとしたからである。本来であれば、京に拠点を構えてもよかったのであるが、信長はあえてそれをしなかった。それは京に一線を画し新たな町づくりと政治を安土でおこなうという彼独自の構想が、すでに天正四年段階にあったからである。

数少ない残された当時の記録のなかで、築城の姿を目前にした宣教師たちは、つぎのような様子を伝えている。その様子はそれまでの日本の城づくりを一変させるものであった。

「彼は都から十四里の安土山という山に、その時代まで日本で建てられたものなかでもっとも壮麗だといわれる七層の城と宮殿を建築した。すべては切断せぬ石から成り、非常に高く壁の上に建ち、なかにはそのもっとも高い建物へ運び上げるのに四、五千人を必要とする石も数個あり、特別の一つの石は六、七千人が引いた。そして人々が確言したところによれば、坂を少し下へ滑り出た時に、その下で百五十人以上が下敷きとなり、ただちに押し潰され、砕かれてしまったということであった。壁と塀は驚くほど高く、それに適した技巧で造られており、切断せぬ石だけからできていても、切石と漆喰でできた我らの石造建築を眺めるのとほとんどなら異なるほど堅固に、そして豪華にできている。宮殿や広間の豪華さ、窓の美しさ、内部で光彩を放っている金、赤く漆で塗られた木柱とすべて塗金した他の柱の数々、食料庫の

大きさ、多種の灌木がある庭園の美しさと新鮮な緑、〈中略〉池、黒く漆で塗られた鉄が打ち込まれた扉、全建築と家並みの塗金した枳がついた瓦、周囲に見張り用の鐘がある保塁の数、新しい豪華な宮殿〈中略〉とおびただしい部屋の塗金した絵画の装飾、新鮮な緑と、きわめて広大な平地、これを越えて望むと、片側には麓に大きな湖があり、各種各様の舟が往来し、他方、見渡すかぎりの田野が開け、その間に城や多数の村落が展開している。それらすべてに全範囲に渡って格別の清純さが見受けられる。」(フロイス『日本史』第三三章)

しかし、これらの文章を今、現地で間近にしるのぶことはできない。なぜなら、安土城は信長の死とともに焼失したからである。これが「幻の城・安土城」の幻たる由縁でもある。その後、人びとはその姿を一目見たいと復元を夢みて数々挑んできた。しかし、それはいまだ想像の域を出ていない。

ここでは、当時の人びとが荘厳で、堅固で、豪華といい、信長自身が天下布武という政治の舞台として築いた安土城の姿を、最新の考古学的調査の成果で検証し、その実像に少しでも近づこうとするものである。